論　文

「杜懐宝碑」の書風に関する書道史的考察
―時代性を中心として―

福　井　淳　哉※

※　帝京大学文学部日本文化学科・同書道研究所

はじめに
Ⅰ．楷書の成立まで
Ⅱ．「杜懐宝碑」と同時代の楷書
Ⅲ．「杜懐宝碑」の特徴的な文字
Ⅳ．結びに代えて
―「杜懐宝碑」の書風からみえる時代性―

はじめに

玄奘三蔵（602-664）による旅行記『大唐西域記』には、７世紀後半より唐の支配下となったソグド系交易都市「砕葉城」に関する記述がある。また、唐代の歴史書『旧唐書』にも、当時そこには安西都護府の１つ（鎮）が置かれ、城壁が新たに構築されたことが記載されている。こうした資料に登場する「砕葉城」であったが、その場所に関しては、長らく判然としていなかったものの、1982年に発見された同時代の漢文石碑「杜懐宝碑」（図１）によって、それが現在のアク・ベシム遺跡と同定された[1]。

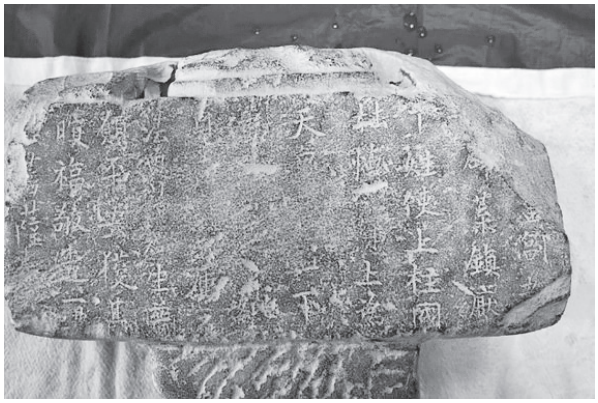


図 1. 杜懐宝碑（680 年頃）

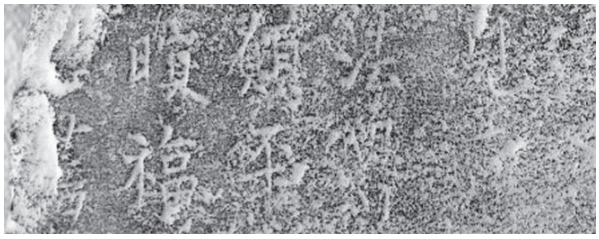


図 1 部分拡大

「杜懐宝碑」の碑文は、その内容を鑑みるに安西副都護という役職に就いていた杜懐宝（生卒年未詳）という人物が、母のために寄進した造像記である[2]。魏、晋、南北朝時代といった時代は、中国に仏教が広く伝播し、これに伴い国内の仏教信仰が盛んとなり、多数の寺院や仏像が造営された。造像記は、こうした流れの中、各地の石窟寺院などに刻された仏像等の、造仏由来、発願者、製作者、時期（年月）などを主に楷書体で刻したものである。特に有名なのは、東アジアで最も重要な仏教遺跡の一つである、龍門石窟にある造像記である。北魏時代に刻されたものは、当時の書風を現在に伝える貴重な資料である。そして、その中で芸術性などに優れた20作は、「龍門二十品」と称され、学書の対象として多くの人々に親しまれている。

「龍門二十品」の多くには、石仏や石窟を造った寄進者の名前が明記されており、寄進者は王族や功臣、洛陽周辺の地方役職者、比丘や比丘尼など、さまざまな身分の人々であったことがわかる。「杜懐宝碑」の場合、筆者は判然としないが、その書風に目を向けてみると、そこには完成した楷書体の姿を見る事ができる。そしてそれは、「杜懐宝碑」の作成年代と考えられている680年頃[3]の時代性に合致するといえるだろう。

例えば、「龍門二十品」に一つに数えられる「牛橛造像記」（図２）は、唐代に完成した端正な楷書とは異なり、荒削りな部分も多く、縦長の字形もあれば正方形に近い字形、横長の字形もあるなど、造形的にパターン化していない部分がみられる。中でも、「方筆」と呼ばれる、起筆や転折を角張らせて力強く線を引き、石を刻むように書く筆法は、「牛

槨造像記」の特徴であり、これは六朝時代の楷書のスタイルとしては主流なものであったとされている。このように、書体が未だ整理されていない黎明期から過渡期の書には、時代性や地域性といったものが色濃く反映されるものが多い。「杜懐宝碑」の書風を考える上においても、このポイントはしっかりと押さえておきたいところである。

図 2. 牛槨造像記（495 年）

Ⅰ．楷書の成立まで

漢字書体には、一般的に篆書、隷書、草書、行書、楷書という五種類の書体がある。この中でも、一点一画を正確に書く楷書は最も遅れて成立した書体であり、隷書から生じたものと考えられている。楷書は後漢末頃の簡牘類には早くもその萌芽が見られ、魏晋の頃に一書体として定着したとされている。そして、「杜懐宝碑」が作られた唐代において成熟期を迎えたと一般的に認識されているところである。なお、唐代を楷書の完成期とする見方もあるが、書体としてはすでに魏晋の頃に完成を迎えていたといえるだろう。

例えば、呉の「谷朗碑」（270年）や「郛休碑」[4]（図３・270年）といったものに加え、西晋時代の「諸仏要集経」（296年）等の書風には、漢～魏と続いてきた隷書の特徴がそれほど顕著でなくなっている。「谷朗碑」には隷書の最も大きな特徴である横画の波磔が見られず、「郛休碑」においても、横画の起筆の筆使いが蔵鋒ではなく、いわゆる露法の楷書らしき特徴を有する筆使いを示している。また、近い年代の木簡や写経をみてみると文字の結構も縦長に変化しているものが確認できる。こうした点からも、隷書体から楷書体への移行が既にこの時代から始まっていたと言えるだろう[5]。

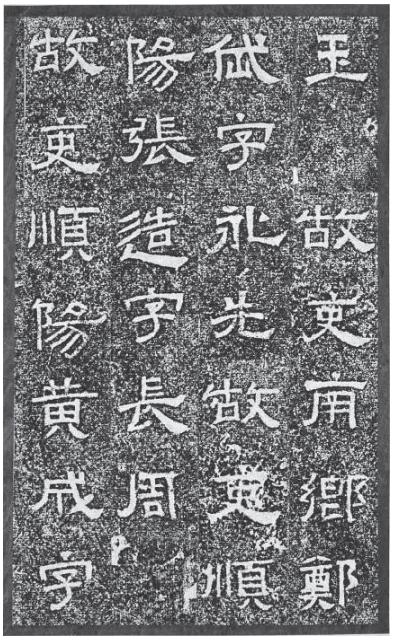


図 3. 郛休碑（270 年）

ところで、楷書という書体は他の書体と比較し、合理的・理知的な性格を備えている。書体の中で最も後年に成立したものであり、可読性という点においてはずば抜けたものがある。つまり、それ程までに人の手によって合理的に整えられた書体であるとも言えるだろう。一般的に楷書というと、三節構造（起筆・送筆・収筆）によって構築されているものを指して言うが、楷書の横画における三節構造を持った最も古いものに、宋の「持世経跋」（449 年）が挙げられている[6]。この書の横画は起筆をはっきりと示し、やや右上りで筆を押し出し、最後は軽く筆を止めているなど、横画における起筆・送筆・収筆が明確であり、前時代の一直線に筆を送り出したものとは異なり、書として洗練されたものとなっていると言えよう[7]。

一方、書聖・王羲之（303-361）の筆として伝えられる楷書の遺品はどうであろうか。王羲之の書と

伝えられる「楽毅論[8]」（図４・348年）や「黄庭経」等の楷書作品は、４世紀中葉に書かれたとされる。字形も整っており、点画を巧妙に組み合わせているだけでなく書法的にも洗練されているなど、「持世経跋」よりも数歩進んだ完成度を誇るものである。羲之の書は、後世の人の手を転々と経て作り直されたものであり、先述の刻石等に比して信憑性に乏しい点には留意する必要がある。

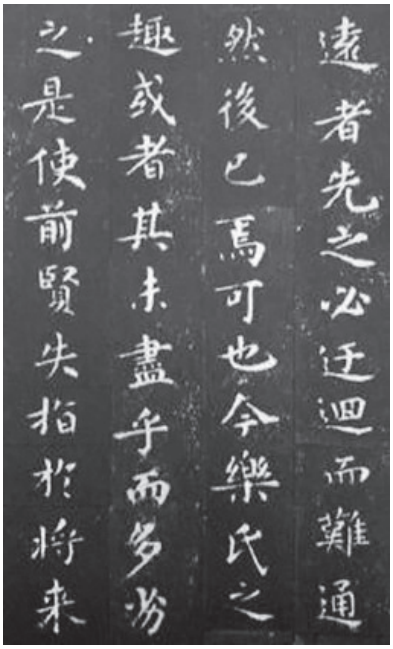


図 4. 楽毅論（348 年）

図 5. 高貞碑（523 年）

５世紀末頃になると、楷書による刻石や墨蹟が数多く見られるようになる。そして６世紀初頭、北魏王朝による碑や墓志等に刻まれた楷書体は、徐々に完成へと向かっていく姿を明確に示している。先述の「龍門二十品」や「高貞碑[9]」（図５・523年）、「張猛龍碑」（522年）等は清末の碑学者たちに注目されてから、「北魏体」または「魏体」ないし「六朝体」と称され、多くの人々に親しまれた。その後、この北魏体の楷書は、東魏、西魏、北周、北斉、斉、梁、陳、各時代を経て、さらに洗練されていく。やがて南北朝が統一され、隋の時代になると、短命王朝ながら、墓誌や典籍などの制作が盛行し、優れた楷書の名跡が生み出されるようになる。そして、初唐（618-712）にかけて、これらの書風は次第に融合し洗練され、初唐の楷書に至るのである。つまり、楷書の完成とは、「初唐の三大家」に代表されるような楷書の様式美の完成を意味するものであろう[10]。

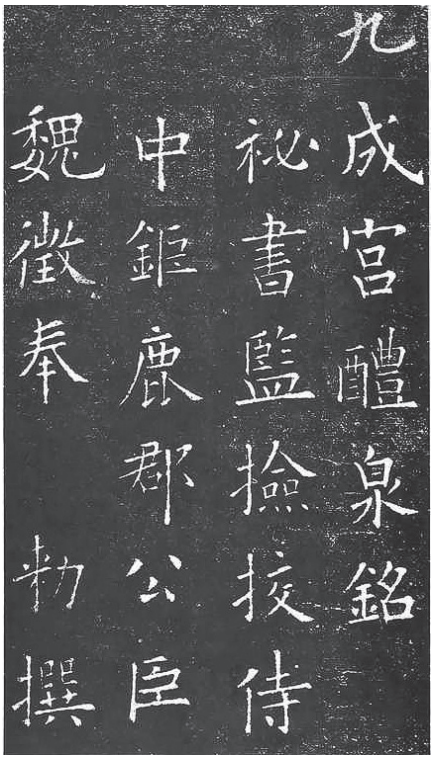


図 6. 九成宮禮泉銘（632 年）

Ⅱ.「杜懐宝碑」と同時代の楷書

初唐の三大家とは、中国初唐時代、唐の第２代皇帝太宗（598-649）に仕えた臣下の中で、特に書に優れていた虞世南（558-638）、欧陽詢（557-641）、

褚遂良（597-658）の３人を称した言葉であり、この３人の能書の手によって楷書という書体は完成の域にまで到達したとされている。初唐の三大家は、三者三様の優れた書を残している。前時代の「北魏体」の楷書と比較してみると、文字の結構や点画が整斉され、文字バランスも均衡を保つなど、一分のスキもない文字構成を示しており、楷書における典型を確立したものと言えよう。これらは古今を通じ楷書の手本の最も著名なものであり、欧陽詢の代表作の「九成宮醴泉銘[11]」（図６・632年）は「楷法の極則」と評され、現在に至るまで広く学ばれている。「杜懐宝碑」が作成された時代は、まさに楷書という書体が花開いた時代なのである。

一方、太宗は能書として名高く、王羲之の書を蒐集し尊重した事で知られている。当時、太宗は書道文化の普及・研究等を推進したことにより、書を学ぶ事はある種の流行のようになった。そして、多くの人々が書道芸術の研究に関わったのである。それにより、書に関する学術的な成果が挙げられたほか、初唐の三大家のような、後世に大きな影響を与えた能書がほぼ同時代に輩出されるなど、中国の歴史上において唐代は書道文化が最も栄えた時期となったのであった。「杜懐宝碑」が作成された当時は、まさに数千年におよぶ中国書道史において一つの大きなターニングポイントといえよう。

さて、「杜懐宝碑」に刻まれた唐代の楷書が備える楷書様式が成立したのは、「永字八法」に代表される書の理論面における研究の進展とその成果がその要因の一つとして考えられている。当時は、「法を尚ぶ時代」とも言われ、後世では唐代の書をある種の規範性に拘束されたものとして捉える考えも存在している。よって、「杜懐宝碑」の書風を詳しく精査することで、唐代の楷書に備わる規範性を見出し、その書風の時代性および背景を分析・位置付けることも可能であろう。特に、中国国内に留まらず東アジアの漢字文化圏全体の同時代の楷書に大きな影響を与えた、欧陽詢、虞世南、褚遂良の初唐の三大家は、確かな自筆遺品が石碑（拓本）として伝来していることから、比較考察の条件は整っていると言えるだろう。

唐代に「杜懐宝碑」が作成された砕葉鎮は唐の最西端に位置しており、当時世界最大の帝国として栄華を極めた唐帝国は、この砕葉鎮より西に領土を拡大することはなかった。つまり、皇帝と官吏が、民を直接統治するシステムおよび、そのシステムに支えられた文字を含む最先端文化のスムーズな伝播も砕葉鎮より西には及ばなかったということである。なお、唐代以前にも砕葉鎮以西にそうしたシステムが及んだ歴史はなく、砕葉鎮は中国史上最西端に位置する都市であったと言えよう。よってこの砕葉鎮は、楷書のような、当時最先端の文明の精華であり人々の生活とも関係した中華文明の拡大・伝播を考える上でも非常に重要な都市である。当時隆盛を極めた書道文化が、唐の極西にまで伝播している点は大変興味深い。シルクロードによる唐の最先端の文字文化の伝播について論じられる時、東への伝播、具体的には朝鮮半島や日本列島への伝播についてのみ論じられることが多い。しかしながら、この「杜懐宝碑」は、シルクロードが東西に及んだ文化伝播経路であったことを、あらためて我々に教えてくれる。唐代の漢字文化の周辺諸国への広がりを考える時、「西へ」という視点を示唆する、極めて重要な書道史上の遺品であるとは言えまいか。

Ⅲ.「杜懐宝碑」の特徴的な文字

さて、「杜懐宝碑」は僅か30文字程度の小さな碑であり、釈文こそ先行研究によってある程度判然としてきたものの、摩滅等の経年劣化により文字のはっきりとした姿をみることができるものは存外少ない。しかし、そうした条件下にありながらも特徴的な文字、注目に値する文字をいくつか確認することができる。

図７. 杜懐宝碑　「葉」

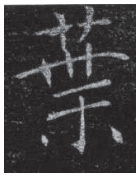
例えば（図７）の「葉」という字は、今日ではあまりみかけることのない異体字であるが、この文字が今日伝わる書跡の中に確認できるようになるのは、初唐の三大家が活躍した時代よりもやや下り、初唐（618-712）の後半から唐王朝が最盛期を迎える盛唐（713-766）の頃である。「杜懐宝碑」を作成

した杜懐宝は、唐が長安に亡命中のササン朝末裔ペーローズの子泥涅師を西方で復権させる名目で進軍した一連の経緯の中で新たに築城された碎葉鎮に赴任した人物である。そして、杜懐宝の着任が680年頃であることからも、「杜懐宝碑」の作成年代は680年頃-686年である可能性が高いと考えられている。このことからも、時代的に符合すると考えられるだろう[12]。

隋　智永　真草千字文

虞世南　孔子廟堂碑

欧陽詢　皇甫誕碑



褚遂良　雁塔聖教序

薛稷　信行禅師寺碑

柳公権　神策軍碑

初唐の後半に入ると、三大家の楷書表現や王羲之尊重の風潮を継承した書が展開されるようになり、欧陽詢の書法を継承した欧陽通（?-691）や、褚遂良の書法に傾倒した薛稷（649-713）や魏栖梧（生没年未詳）などによる優れた楷書がみられるようになった。また、こうした初唐後半の楷書には、師風追随とでも言える傾向がみられるようになる。先述の欧陽詢の欧陽通の２人は親子であるが、欧陽通の代表作である「道因法師碑[13]」（図８・663年）などはまさに父欧陽詢の「皇甫君碑[14]」（図９）を彷彿とさせ、まさに父の書法を子が受けつぎ発展させた書風の継承関係を示している。一方、褚遂良と薛稷の関係は欧親子とは少し異なる。薛稷の伝記に述べられているように褚遂良の書に私淑した様子が綴られており、薛稷の「信行禅師寺碑[15]」（図10・706年）には褚遂良の「雁塔聖教序[16]」（図11・652年）を学んだ痕跡をみることができる。こうした私淑による師風追随とも言える傾向は、後の顔真卿（709-785）と柳公権（778-865）の関係にも繋がるものがあり、盛唐以降になると、師伝的というべきか、いわゆる類

図８. 道因法師碑（663年）

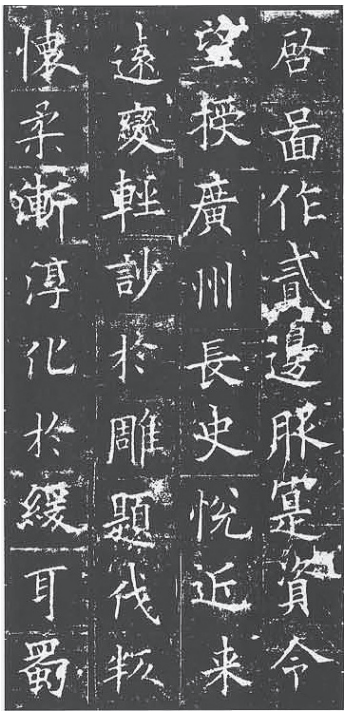


図９. 皇甫君碑

図 10. 信行禅師寺碑（706 年）

図 11. 雁塔聖教序（652 年）

筆関係が見える非常に明確な書法相伝の流れが示されるようになるのである。

これに加え、「杜懐宝碑」において「葉」と同様に注目することのできる文字が（図12）「敬」である。「杜懐宝碑」にみえる「敬」は５画目が横画になっている点が特徴的であるが、これは虞世南の「孔子廟堂碑[17]」（図13･628年）や、欧陽通の「道因法師碑」にみえるものとは字形が異なっている。そして、顔真卿の時代になると、然程見られなくなるようになるものなのである。

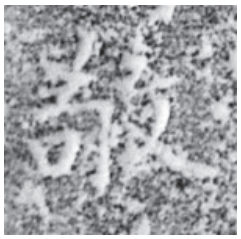


図 12. 杜懐宝碑　「敬」

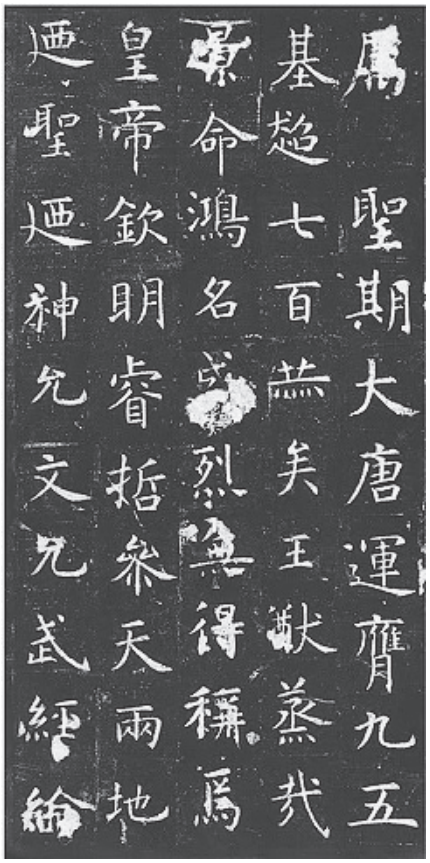


図 13. 孔子廟堂碑（628 年）

こうした「敬」の字が確認できるのは、鄭道昭（?-516）の「鄭羲下碑[18]」（511 年）や高貞碑といった北魏の楷書に多い。北魏が華北を統一した 439 年から、隋が再び中国を統一する 589 年まで、華南には宋、斉、梁、陳の４王朝が、華北には北魏、東魏、

西魏、北斉、北周の５王朝が興亡した。漢民族による南朝の４王朝は、三国、呉、東晋に続き建康（江蘇省南京）を都とし、資源豊かな江南の地に魏晋より形成されてきた南朝の貴族文化が栄華を極めた。書においても、東晋・二王（王羲之、王献之父子）により高められた技法が継承された。それに対し、北魏をはじめとして、北朝の５王朝はいずれも北方民族によって建てられた国である。貴族文化が洗練された南朝に対し、北朝は民族固有の精神性や優れた漢文化を継承し、南朝とは異なる新たな文化を形成していった。書においても、「龍門二十品」に代表されるような魏晋の旧体に強さや荒々しさを加えた特徴的な書風が生まれたのである。このように、王羲之書法を継承する流麗な南朝の書と、異民族による個性的な北朝の書、といった地域性が書の中に見えるようになるが、洛陽遷都と、東魏、西魏から北斉、北周への王朝交替を期に、南朝新様式の書との融合が一層進み、構築性に富む洗練された書が生まれ、やがてそれは初唐の三大家によって完成されたのであった。

北魏　鄭道昭　鄭羲下碑

北魏　高貞碑

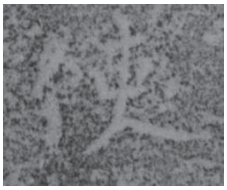
虞世南　孔子廟堂碑

欧陽詢　化度寺碑

欧陽詢　温彦博碑

欧陽通　道因法師碑

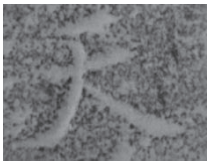
初唐の三大家の中でも、欧陽詢と虞世南は南朝の陳に生まれたが、２人の書をそうした南朝の書と評することができるかと言えば決してそうではあるまい。例えば、虞世南の場合、王羲之の子孫である智永に書を学んだだけあって、その書法の出自は智永ないし、智永を通じ二王（王羲之とその子王献自之）の書法を継承したものとされ、盛唐時代に記された書論書『書断』においては、「内含剛柔」、つまり外面に美しさを表わさず内面に沈着した力強さをもつものと評されている。一方、欧陽詢の書は「険勁」、用筆法によって創出される強く険しい線質と、結構法により構築性（文字のどの部分を主とし、どの部分を従とするのか、どこを軽くしどこを重くするのかといったバランス）を備えたものと評されてきた。こうした違いから、虞世南は南朝、欧陽詢は北朝の流れを汲む書風を受け継いでと考えられている。そして、欧陽詢の「化度寺碑[19]」（631年）の中に、「杜懐宝碑」同様に北魏の楷書に見られるような「敬」の字が確認できる点も興味深い。


杜懐宝碑

虞世南　孔子廟堂碑

欧陽詢　九成宮醴泉銘

褚遂良　雁塔聖教序


杜懐宝碑

虞世南　孔子廟堂碑

欧陽詢　九成宮醴泉銘

褚遂良　雁塔聖教序

しかし、特徴的な文字や、そして当時の「師法墨守」という学書上の傾向から、「杜懐宝碑」の書風が欧陽詢の書法ないし、北魏系の書法を継承したものと一概に言えるものではない。というのも、「杜懐宝碑」の中には、三大家の代表作に共通する文字

があり、それらを比較する事が可能であるが、そのすべてが欧陽詢に近い性質を備えたものではないからである。例えば、「使」という字に関していえば、三大家の代表作の中では「孔子廟堂碑」に確認できるものと近い性質を備えている。一方、「天」や「福」の字は「雁塔聖教序」で確認できる文字の特徴を備えているなど、「杜懐宝碑」の書風を何か１つの枠組みの中にカテゴライズすることはいささか難しい。しかし、これより以後、盛唐の時代になるとこうした楷書表現は顔真卿によりまた新たな局面を迎え、盛唐は書道文化全般に大きな変革期が訪れることとなるが、それらのいずれも、初唐の頃に発展した書法や書論の研究成果等を継承したものである。つまり、三大家それぞれの特徴が混交している「杜懐宝碑」の書風は、三大家のその先、初唐の洗練された書法の確立から盛唐の革新的書法が確立されるまでの過渡期の書風、洗練された新たな様式を整理し再構築しようとする、いわば実験的な書風であると解釈することも可能であろう。

Ⅳ. 結びに代えて―「杜懐宝碑」の書風からみえる時代性―

盛唐の書の象徴とも言える顔真卿が、「蚕頭燕尾」と呼ばれる独特な筆使いなどを駆使した幅広い表現を見せる楷書の名跡を生み出すなど、初唐以来の書の潮流は中唐へ至るにつれ次第に変容を遂げていく。盛唐以降には、篆書・隷書といった古い書体に再び注目が集まり、秦代の李斯（？-208）とともに「二李」と並称され書表現の規範として後世長きにわたって尊尚された李陽冰（生没年未詳）や、唐６代皇帝玄宗（685-762）の特徴的な隷書である「唐隷」といった復古的かつ、唐代の書学研究の成果を取り入れたあらたな書表現が生み出された。また、張旭（生没年未詳）や懐素（725? ～ 785?）といった従来の書表現の枠組みを越え逸脱したとも言える「狂草」という革新的な書法が興った。「杜懐宝碑」は、そうした初唐から盛唐への過渡期の書の様相と、書道文化の流れが唐の最西端にまで及んでいた事を示す貴重な遺品であると言えよう。民族学者の柳田國男（1875-1962）がその著『蝸牛考』において、蝸牛を表わす語が時期を違えて次々と京都付近で生まれ、各々が同心円状に外側に広がっていったという過程や、それにより最も外側に分布する語が最古層を形成し、内側にゆくにしたがって新しい層となり、京都にいたって最新層に辿り着くという方言周圏論を唱えたが、「杜懐宝碑」には、そうした唐代の書道文化が、長安を中心としてどのように伝播し変容していったのかを図り知る上で、大変貴重な資料と成り得る可能性を秘めているのである。

註

1）内藤 , 1997.
2）「杜懐宝碑」には、「願平安獲其冥福敬像」と記されているほか、像造記にみられる文章表現を確認することができる。柿沼 , 2019.
3）柿沼 , 2019.
4）西晋時代の碑文は非常に少ないため、この碑は、漢字の発展の歴史の窺い知る上で、貴重な資料として知られる。
5）西原 , 2015 など。
6）西川 , 1962.
7）西川 , 1971.
8）正倉院に伝わる「楽毅論」は、光明皇后（701-760）が王羲之の「楽毅論」を臨書したものである。光明皇后の「楽毅論」は、王羲之と比して、線が強く、メリハリがきいているといえよう。
9）523年刻。先帝・宣武帝の皇后の弟・高貞の26歳の死に臨み「魏故営州刺史懿侯高君之碑」として建立された。北魏の力強さと初唐の整正を兼ね備えたような書風であり、結体の巧緻や抑揚の変化に優れる。
10）藤森，2011 など。
11）貞観６（632）年に唐の太宗が，九成宮（隋の仁寿宮を修理・造営した場所）へ避暑に行ったとき、宮殿の一隅に醴泉（味のよい泉）が湧出したのを記念し、魏徵に命じて撰文し、欧陽詢に書かせて立碑した。
12）柿沼 , 2019.
13）玄奘三蔵の訳経に協力した高僧、道因の徳を称えて建立された石碑。文は李儼の撰し、欧陽通が揮毫した。欧陽通は、父欧陽詢の書風を追随したが、本碑は欧陽詢よりもやや筆画を強調させるような筆法が特徴的である。
14）隋王朝の名臣であった皇甫誕を顕彰した頌徳碑。無紀年であるため年代は判然としないものの、貞観年間の欧陽詢が75～81歳くらいの間で書かれたものと推察される。細く引き締まった線で、強い右肩上がりと背勢の結構法が特徴。
15）三階教という仏教の一派を興した信行禅師の業績をたたえた碑。文は越王貞が撰し、薛稷が揮毫した。隋から初唐にかけて一時的に流行した三階教の貴重な史料。
16）陝西省西安市の慈恩寺大雁塔にはめこまれている聖教序碑。玄奘三蔵がインドから仏典を持ち帰り、それを漢訳した功績に対して、唐太宗と皇太子がそれぞれ文を撰し、褚遂良が揮毫した。

17）唐の太宗が長安の国子監内に孔子廟を改築し、その完成を記念して建てられた碑。皇帝の命により、虞世南が撰書した。立碑は629年頃と推定されるが、建碑後まもなく火にかかり、亡失した。虞世南の確かな書はこの一碑のみ。

18）北魏時代に刻された摩崖碑（天然の崖壁や石に刻したもの）。筆者である鄭道昭の父鄭羲を讃える文章が書かれている。なお、下碑というのは、これ以前に書いたほぼ同文の上碑といわれるものがあるからである。

19）隋の三階教の高僧邕禅師が、貞観５年に化度寺で入寂し、その後、長安の南にある信行禅師の霊塔の左側に建てられた舎利塔の銘文。

文献（五十音順）

青山杉雨他編 , 1991-1993,『西川寧著作集』, 二玄社 .

伊藤滋 , 2002,『游墨春秋 木鶏室金石碑帖拾遺』, 日本習字普及協会 .

伊藤滋 , 2013,『中国古代 瓦の美―文字･画像･紋様の面白さ』, 郵研社 .

内藤みどり , 1997,「アクベシム発見の杜懐宝碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』, シルクロード学センター .

大谷大学編 , 1967,『宋拓墨宝二種』

角井博他著 , 2009,『決定版 中国書道史』, 芸術新聞社 .

柿沼陽平 , 2019,「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』, 第18集.

加藤九祚 , 1997,『中央アジア北部の仏教遺跡の研究』, シルクロード学センター .

神田喜一郎 , 1985,『中国書道史』, 岩波書店 .

櫛原功一 , 2018,「アク・ベシム遺跡出土の瓦」『山梨文化財研究所報』第57号.

礪波守 , 1986,「唐中期の仏教と国家」『唐代政治社会史研究』, 同朋舎 .

玉村霽山編 , 1998,『中国書道史年表』, 二玄社 .

中村不折 , 1929,『学書三訣』, 西東書房 .

二玄社編 ,『書跡名品叢刊』, 二玄社 .

二玄社編 , 2007,『大書源』, 二玄社 .

西川寧 , 1971,「楷書の書法」『書道講座第１巻』, 二玄社 .

西川寧 , 1962,『六朝の書道』, 大安 .

西原一幸 , 2015,『字様の研究 - 唐代楷書字体規範の成立と展開 -』, 勉誠出版 .

藤森大雅 , 2011,「楷書風格の一考察―欧陽詢を中心に」『書学書道史研究』, 書学書道史学会 .

森安孝夫 , 2016,『シルクロードと唐帝国』, 講談社 .

山内和也・櫛原功一・望月秀和 , 2018,「2017年度アク・ベシム遺跡発掘調査報告」『帝京大学文化財研究所研究報告集』第17集.